

塵

点

録

六十六上

049

ア3

66-1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9

正月

雜物

豐亨
神皇正統

天仙殿殿正金

元氣之運

尾張國守之辭

赤賀玉之符

蛭見
千珠漏珠

大國主之姓本之說

柳公之字法

塵點錄

和漢古今諸說

熱田之記
六十五

宗廟
十本皇系本
心所拜之法

儀式衣服之令

河國治古

東忠公被記口宣

鬼頭假面
指田名之神

渡邊綱

圖書文書課

A04
73
66-1

A049
73
66-1

靈仙院様御香典 爲人抄被萃り

史編纂
係七印

掠五郎景實

。上總惠七之傷尉景清 尾張國惣西之住ス後
ナリテ日向國ニ住ス

。赤檜桐授守守時領知四万七千余貫當代ノ知
行ニシテ二十三万五千石

右印の部家系也

。依ノ承定細カ孫鏡廣門尉之細 兼久三年京方ニ参
尾張國大臣津波之自害ス

部家系也

県文化会館
33.7.30
40305

- 丹ヲ煮中ニ於ル水干シ陰莖ノスリムキ等ヒ子リカクル抄也
- 尾上ニ洒レタル蛤貝ヲ煮シテ用ルモ妙也
- 土ノ埒ノ代ニ土ヲ用ケル等ト曲突の中ニ埒ヲ入湯ヲ沸ス
- 上柘ぬミタナベラト云萬アリ形鱗ノミ
- イワナト云臭モ有之形身鱈ノ如ク六尺余リ毛有之蛇蛙等
- 香炉ノ灰ニハツルベ繩ノ古キヲ燒テ其灰ヲ用ユ
- 灰白クシテ火ヲ止ム
- 火燧ノ灰ニハ結解ノ莖ノ如ク思フノ灰
- 莖ニ不堪肌ぬくと入燧ス之を灰なり
- 牧皮^三 牧皮也桶等ニコミテ吉

戊寅十二月

日五ノ丸椽

五牧 松平求多友

靈仙院様御香奠

増上寺

百牧 尾張大納言椽日

室中夜ノ息女 橋姫ノ方

白銀廿牧 ^{三ノ丸椽} 津名代

五十牧 徳川石倉御椽 三牧

名代七島丹丸

日百牧 露原名椽 ^{名代津又名}

亦牧 松平播磨名友 十牧

名代川口名友

日廿牧 露原名椽 ^{名代}

十牧 日真方 廿牧

紀伊大納言椽 津名代

日 八重名椽 ^{名代山名}

亦牧 松平出石名友 十牧

日真方 安三椽

三

三牧 佃考書 芳又院友

二牧 土屋打接書友

二牧 同息女 政惟友

一牧 上秋澤田友

一牧 菅原依成書友

一牧 永井修實書友

真方

一牧 湯升雅樂書友

一牧 松平之平書友

五牧 水戸中納言友

一牧 福多丹治書友

一牧 井戸村之吉友

十牧 同亭相友

一牧 柳沢出右書友

二牧 松平陸真書友

五牧 同真方

一牧 松平古系亮友

一牧 松平淡路書友

書信

一牧 秋元信子書友

一牧 布衣伯孝書友

一牧 同差中

二牧 松平播磨書友

三牧 松平内親友

廿牧 軍府中納言友

一牧 弟念丹治書友

五牧 松平玄妙書友

三牧 尾張大納言友

一牧 同大學外友

一牧 松平信成書友

十二月五日

一牧 所名代玉並市正

二牧 牧野信房書友

五牧 松平忠之丞友

一牧 同松平安孫書友

一牧 松平上桂友

名代 小畑五郎

十牧 同飯沼書友

一牧 同岩崎書友

五牧 自昌院友

一牧 石巻下總書友

十牧 松平肥後書友

三牧 同海北成平友

二牧 同息お豊書友

五牧 伴升孫次郎友

十牧 同真方

一牧 石巻伴藏友

三牧 阿戸豊後書友

三牧 同海北内通友

一牧 同大藏友

一牧 戸田山城書友

五牧 同御田書友

一牧 同升上親友

名代 永田傳友

二牧 由流紀伊守殿 曰 是 祿在 右 曰 金二百疋 かつら どの

三牧 松平大木守殿 曰 土屋 忠之丞 内 曰 相 あり どの

二牧 松平 俊徳 守殿 曰 藤平 勘十郎 曰 右 所 産 楳 尻

一牧 橋本 孫三 守殿 曰 藤下 希三 守殿 曰 金二百疋 二 あり どの

五牧 松平 信濃 守殿 曰 天 之 保 孫 三 守殿 曰 右 の 井 どの

三牧 仙石 訖那 守殿 曰 大 橋 平 守殿 曰 美 の 中 孫 どの

十牧 丹羽 康高 守殿 曰 甲 府 勘 助 曰 右 局

三牧 町 地 造 河 内 守殿 曰 金 二百 疋 堀 原 繼 左 守殿 曰 右 局 甲 府 勘 助

一牧 曰 幸 室 守殿 曰 祿 一 牧 鳥 井 守殿 曰 金 五 百 疋 右 局 どの

二牧 祿 荒 平 刀 取 曰 大 典 侍 曰 右 局 どの

曰 加 藤 謙 中 守殿 曰 右 局 どの

曰 井 上 頼 貞 守殿 曰 右 局 どの

一牧 祿 原 河 内 守殿 曰 金 三 百 疋 あり どの 金 三 百 疋 法 務 どの

曰 河 地 久 守殿 曰 梅 津 守殿 曰 右 局 どの

曰 布 衣 新 守殿 曰 二 孫 守殿 曰 右 局 どの

曰 曰 物 之 惣 守殿 曰 堀 尾 守殿 曰 右 局 どの

曰 曰 山 崎 守殿 曰 右 局 どの

曰 右 局 守殿 曰 右 局 どの

金 三 百 疋 曰 右 局 どの

曰 右 局 守殿 曰 右 局 どの

曰 右 局 守殿 曰 右 局 どの

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

金 定

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

四

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

定 定

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

六

尾中御衣

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

七

あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの
あつちの

二牧

山村 志之丞
子村 平兵衛
津田 政之丞
御所 内膳
吉尾 内膳
滝川 孝景
中條 三之丞
浅井 三之丞
法甲 新十郎
慧川 清久
保原 清太郎
水本 惣兵衛
生野 五郎
浪戸 十十郎

+

三牧宛

二牧宛

如所 忠重
吉原 高次
四井 清久
松井 五郎
西田 高心
阿戸 海友
乙川 伴藏
下条 兵衛
中條 三水
中條 清兵衛
浪戸 十十郎
吉原 十郎
田嶋 清太郎
上野 高之丞
一文 信兵衛

三定

大久保 清三下
金三定 梶川 高之丞
日 吉原 高心
日 大橋 勘兵衛
日 大田 勘兵衛
浦井 宗之丞
上村 高兵衛
梶川 惣兵衛
中條 勘兵衛
三宅 高之丞
吉原 高心
山崎 高之丞
永島 高兵衛

九

中村 又左
石本 高兵衛
筋田 高兵衛
村上 惣兵衛
志水 高之丞
山崎 高之丞
横井 高之丞
石原 内膳
松井 高之丞
津田 高之丞
山崎 高之丞

三牧

石川 高之丞
高木 高之丞
浪戸 新十郎
慧川 高之丞
大橋 勘兵衛
石原 高之丞
小坂 下兵衛
河村 高之丞
沼田 代兵衛
徳嶋 高之丞
松生 高之丞
若林 高之丞
船山 高之丞
志村 高之丞
橋本 高之丞
吉原 高之丞

五定

浪色

一牧

全三定

三牧

至賀 高兵衛
安原 高兵衛
北田 高之丞
甲中 高兵衛
中尾 高兵衛
小坂 高之丞
山下 高之丞
坂下 高之丞
松本 高之丞
河原 高之丞
横井 高之丞
若林 高之丞
日 高之丞
奥山 高之丞

^四一收 汲谷松野
 金澤是 葛川源休
 日 山村多房
 日 水中寺之
 日 和而十院
 汲收 古之保金寺
 日 四谷成覚寺
 日 日 秀光院
 日 日 芳二院
 日 日 宝松院
 日 日 惠照院
 日 日 最勝院
 日 日 安立院
 日 日 天光院

^六日 護國寺傍心
^七日 佛通院
 日 天徳寺
 日 淺原西福寺
 日 日 最勝院傍心
 日 日 南谷院
 日 日 本刹寺
 日 日 天徳寺
 日 日 本刹寺

^八日 柏木
^九日 女野寺
 日 日 最勝院傍心
 日 日 南谷院
 日 日 本刹寺

納経
 三部経 念院方丈
 法苑珠 日光寺王正系
 日 凌雲院大僧正
 日 護持院大僧正

^十日 芳心院隱岳
 日 在殿山一宗院
 日 志呂山老福寺
 日 日 金剛院
 日 日 金剛院

以上
 三百枚 浄尊礼料
 千枚收 讀経料
 三百枚 二万枚写料

^{十一}日 三十日箇法
 要日中法
 同 四七日施餼鬼料
 千枚 廿五日五百部讀
 經料
 殿梯分
 日 芳心院隱岳
 日 在殿山一宗院
 日 志呂山老福寺

^{十二}日 六七日取法夏料
 千枚 四十九日 日
 同 百ヶ日 日
 五百枚 袖方心後百ヶ
 日 日 靈鑑方料
 日 日 推草一箱
 十日二月十日三月十日

沉水高 靈雲寺 覚考
 日 日 金剛院
 三百枚 六七日取法夏料
 千枚 四十九日 日
 同 百ヶ日 日
 五百枚 袖方心後百ヶ
 日 日 靈鑑方料
 日 日 推草一箱

三百枚 二万枚写料
 十三
 十五日

十六 役者

殿様ノ 吟連上人

浪ノ 牧 尺長上人

宛 月光院

大殿様 本陽院

浪ノ 三牧宛

十七 浪ノ 七千八百牧

大判 三牧

金子五拾九五二分

石ノ 牧ノ 了順

三牧ノ 了雄

左石ノ 牧ノ 了

沙ノ 了

○ 烏紗帽 見見 晉書輿服志 我國烏帽子 本レ 之カ 欵

秦始皇時以紫緋録袍為三等服

見唐舊紀 我國衣紫緋非 緑縹深 淺八等服

者唐高宗武德之制也其他漆紗幘頭等

皆習之唐

○ 两部習合之神祠有二義一有以我國自古所

祭之神祇名出跡以佛菩薩為本地者併勢

為木日春日為祓迎類也二有本祀異邦之神

而後換以我國神号者牛頭天王為素盞馬

辨才天為名稱靈類也

良泉云亦才天之信景公相ノ誤アリ

妙見吉神夫尖夫摩利支天陀祇尼天金剛童子等ハ共胡竺之神
泰山府君赤山新羅等祠漢土之神也今大緊為我國神号者多參

支牛頭天五者西域神也其祠初立播麻于國廣峯

脰武帝後移山城國感神院 清和天皇 所祭牛頭天王

之朝也 婆利女八王子也 今ハ素戔嗚稻田媛五男三女神

諸神根元抄謂之精舍則專似不為神社且式撰之日

於神名帳不載之意當日指述為我國神歟近世薩摩

及肥前祭異邦海神天妃是亦有後世換於我國

神者則又諸功習之奉祀必矣

○因幡入道宗岳君書實に古への射家此故ぞ見く侍り

近年射藝此書私に傳りぬ——たゞそのよかき

は——傳受はるいと早

○ 跨 アトラン あといの——こふこゆを

欺 ウラナフ うらなふもさむくお利

苗 田代始く先づのこころを 新墾と意と通ス

欲 ホツス 百草ありあるとも免りがりひさかりのありと

福 フク 福がしとをく

帥 シ 引はるこいをはいて行の井はどくはせと

寧 ナラフ

——の意は附字ツケジなり。神カミなり。のり
字の——
付字

贖 カガム

たぎ、奥ウラころに付字

殆 オホク

不フと意下れとに付字

借 カサフ

儔トウの字と目——意ひととに

こらふに、但借の字に、
貴人キニも、儔の字に、
り

刺 サス

——

即 ソレ

——の階ハシと、

直

た——

聊 シカ

最細イソサヤカ乃意

速 スミヤカ

——、
助語

恰 アツカ

——、
俗ソコ

須 スハラフ

——、

——、
前後へ、
二ッ合へ、

よむ如何と云へ侍る

麴塵コクジンこくじん此種音之和訓よりん

袖スズメ衣イ手テ有利アリ

浅葱色アサギイロ浅黄アサギと書ハ非之請経ハ葱珎と有と青き由ん

~~~~~

萌葱色モヘギイロ

鳥カラスくろくろ此種語也

芭蕉音コトバセウあ々と転ドしてををと和訓より

鸚鵡音

アウムあうむ転ドしてりあむとまきあむと  
形有利但是あむと奇書とわく時のあむと  
法師ホフとほしし書きあむとあむと  
本くと回しあむと

琴コト音コト絃イト也

壽コト言コト向ムカヒ也イと云いしとあむ送ると云命数時也

~~~~~

五加皮ウツキヤらこい五加の唐音也

菠薐草ハシらうせんいんまの唐音也

○大簇夾鍾等の十二律ハ周以來の律呂あり
壹越断金等の十二調を言解樂の調子ありと
我五樂家の説あり又笙は古と古今あり
あり今唐の笙といふ長

○中臣後禰死のそぶたちとくけらと伊勢よそを
あおんのそぶたちと唱ふ死とあおるといふ
汝まれ忌言あしあり熊野の祠官かひにあ
そぶたちと懐是能野の古語ありとやト郊
家一のそぶたちとよむトま字音あり

和傳の祝詞に漢音とよむト作らんとはる
あ

○祢宜みぎのそぶとい言ありカニヌミ神主春日めく又官
あま諸社にハ凡て祠官れ号あり

○~~書~~七篇之目下章句字

或人曰是趙岐為註時置今集註本不可有章
句字當時本字刪之而後人又添之乎抑集註
成日有不刪尽者乎今講集註者章句二字
不讀之而可也予按正義合篇為上下者固趙

氏所為也。意以誣疏有梁惠王章句上凡七章。等字故為趙氏所筆。欲按孫奭序云為之註者。則有趙岐陸善經為之音。則有張鎰丁公者。著自陸善經已降。其所訓說雖小有異同而共宗。趙氏惟是音釋。二家撰錄俱未精當。張氏則徒分章句。句滿落頗多。丁氏則稍識指駁。偽謬有云以此見之。則張鎰始合七篇章句。後趙岐分各篇為上下十四篇者也。朱子蓋從之。而不改。故存章句及凡幾章。字不刪乎。

然則今日請集註時讀之亦不可為非也。庚辰仲冬十三日記之。

梵網經殺生具戒第十。曰菩薩乃至殺父母尚不加報。況殺一切眾生。云嗚呼浮屠無父母如此乎。文為君父不報仇則不敢戴蒼天。孝子忠臣豈與浮屠氏犯不忠不孝大罪。男子宜致思。同不生自要戒第三十六。曰寧吞熱鐵丸。云不以破戒之身受信心檀越百味飲食。又曰寧卧大猛火羅網熱鉄地上。終不以破戒之身受信心檀越百種牀座。

故縱破戒者豈有此等堅固之
志佛經凡不辨之而妄言尤多矣

愚按俗傳三社詭宜見神樂圖記及八幡詭宜所

謂雖食鐵丸不受心穢人物雖坐銅焰不到心濁

人處者蓋取丸網之文為之且六根清淨之言出

法華等然証神宜為祝詞号六根清淨被祠

官於神前唱之而自謂不混習合者可笑甚也

能野 新宮每年九月十六日神輿と船にのせりて

後そ波の船カウチゴ唐兒とて幼童に綿繡の糸ときき

紙笠に山名ノミの尾とてさしおほ其波ハ神人

多くありて嶋島りと号し御船嶋と云き

先より丹生山ニフクに神輿とてはしそ十一月

十六日に海産のものありとて唐兒ハかこ

らありきり

明日陳元斌具謁拜寛文三年壬寅冬也

寄跡東海數十春 威公升斗活窮鱗

幾年^カ閼闕^カ瞻^シ無^ク有^ル

今日^カ去^リ宮^ノ拜^ス有^リ因^ル

驥^ニ因^テ鹽^ニ車^ニ憐^ミ伯^ノ樂^ヲ

龍^ハ埋^レ神^ノ劍^ヲ辨^ス豐^ノ城^ヲ

白^ク頭^ニ一^ニ滴^ニ酬^ヒ知^ル淡^ク

銘^ハ德^ヲ千^ニ秋^ニ永^ク不^レ磷^ク

自^レ注^ス云^ク城^ノ音^ハ申^ス古^ノ韻^ハ通^シ用^ス唐^ノ李^ノ適^ノ詩^ハ化^シ工^ノ粧^ス

點^ハ洛^ノ湯^ノ春^ノ柳^ノ絮^ハ飛^ビ花^ハ散^リ滿^ク城^ニ

○ 萬^ノ國^ノ全^ク圖^シ以^テ天^ノ下^ヲ分^ク五^ノ大^ノ州^ニ曰^ク亞^細亞^曰歐^羅巴^曰利^未亞^曰

亞^墨利^加南^北洲^曰墨^瓦蠟^泥加^是也^清國^及日^本當^テ

赤^道北^有三^十一^度四^十度^之中^皆亞^細亞^内也

○ 太^上極^尊之^稱也^天子^之父^故号^曰皇^不預^治國^故

故^不言^帝也 前漢書注

按^レ我^國太^上皇^帝と稱^スるハ漢^人ノ意^ニあ^リま^ス

○ 陽^病則^陰勝^故馬^疾則^臥陰^疾陽^勝故^牛疾^則立

此^言道^化權^輿に^あり^て後^俗馬^ハ立^カど^ク牛^ハ歩^クど^ク人^ハ是^トり^マス

○ 郭^璞が^佛々^ノ贊^ニ云^ク佛^々恠^獸被^髻猩^足獲^人

則^笑唇^蔽其^目終^乃蹄^啡反^為我^戮と^りマ^ス

夫^佛と^ハ一^禽獸^人と^獲て^笑ふ^笑へ^ハ唇^面と^蔽ふ^人釘^とひ^て其^唇と^おつ^けて^人を^殺と^りマ^ス

未嘗見齒ハ礼の重き所胡盧絶倒ハ允甲れ
大笑あり然るに車如一笑の微国じこと
到り迎葉が破顔カハや一毒と万国マンコクに流す基と
せり一曾肩ウソカシカタウシテラウソク諂笑ハ側嬪ソバガの態ありけり陸雲り
所謂笑疾ありと子も有い海しむる是れ
にしえ
へりけいん 夏冬の俗語

僕登僕登 へりけいん
へりけいん
へりけいん

ま合ま合 へりけいん へりけいん
へりけいん へりけいん
へりけいん へりけいん
へりけいん へりけいん
へりけいん へりけいん
へりけいん へりけいん
へりけいん へりけいん
へりけいん へりけいん
へりけいん へりけいん

那鯉ナニフ ナニフ 減減ハハリ
自盛モリニシ 減減モリニシ
盛而減也 不敢看
天ソテ ハリニハ ス アニニ

かくぞいふと胡琴の吟

書院玄關の如く我國古へあり——室

公家の時五山は禪院書院玄關と三ツ時若

好しそ柳堂にうけ——他と——今

さ——武家のうけとあつり

中院の佛家の舎にあつり異那

儒学者の形あり

又床に観音 連唐布袋ふどの益を白く中央の

卓に香花を置くと又禪杖の風俗ありと今

禪刹年の始に客殿の一間と掃ひ観音の像と白く

中央の卓に香花ととふら門家の拜年と待とを

とふら——出山は杖迎の像ハ成道忌の奉るふらと俗

家者ものと白く作ら又歳旦に待作り 作ら

ふらとら——毎年—— 我國学者と

りくば必元日の待作らるるに——あつり

に是も五五山及び妙心大徳寺は禪僧元旦は

香悟と作りて唱へ作らふあり凡ッ今も学者多

くハ中世禪家のせ——と今も多 歳旦

必^ス待^ル化^リ信^スも香^レ倍^トとあ^ルく信^スあるべ^シ

詩^文も亦^タ報^ル東^ノのふ^ハあ^ルべ^シり^ラれど異^邦の

帝^ヲあ^レバ習^テ香^語あ^リどほ^クせ^リ

我^ノ宗^者其^ノ根^本と^シま^シも僧^家よ^リり^シて

あ^ルふ^ルあり^キ能^クま^シり^シと^シたり

○ 我^レ五^修驗^道と^シて一^種の異^端あり^しも^シこ^レ

道^ヲま^シれ^ルく^レに^シて浮^圖に^より^て家^とま^シつ^レ律^ニ

優^婆塞^と始^祖と^シり^シ今^亦山^當山^のあ^ル流^{あり}

真^の祖^とす^ルお^ノあ^ル流^{あり}と^シて^シ慶^長八^年海^防
各^別に^あり^した^に我^レ執^寸寛^文八^年平^福と^シり 本^山の^貫主^ニ

熊^野三^山檢^校と^号す^ル中^世に^しり^キ 勅^許れ

号^{なり} 良^諭信^正代^の跡^かい^は三^山の^檢校^に補

せ^しと^シ時

は^くり^つ思^ひに^しり^キも^シみ^らる^ゆゆ^に辨^れあ^るも^シや

され^バ熊^野流^華の^時に^信と^えま^しと^シたま^ひ

役^行者^能あ^らう^金峯^へ駐^出又^タ金^峯より^熊野

出^峯せ^しも^シ數^十度^{あり}か^は信^正其^ノ流^と

先^遣と^しり^しも^シひ^らる^ゆや

駐^出出^峯と^順逆^の入^峯と^しり^し

本山ガタ方ガタにりりり富山ニ出峯トのこりり作ル
聖室宝寛平七年に峰中の蛇と殺ヤ
故事トりりれど本山ガタ方にハ聖室宝毒蛇ト
加持セしハ東大寺ニ東南院ヨそののあり
とりり

山ヤマ臥家ノ我慢ト先トりりるめとりり
況シや本當ニある家ノ日ヒ唾カ菌シしりりり
わらりり幸ニ東西ニ奔ル邪ノ奇ノの信位似あり

○ 細川ニ幸ニ昔ノ日軍中よりハ古ノ今ノ傳ノ換ノの一箱トを長味

とりりり封トとりりりりり

あけてハあらわらぬとあらわらぬとあらわらぬとあらわらぬと
浦波もままとりりりりりりり

○ 唐ノ太宗ノ不レ敬ノ教ト 元ノ氏ノ謂レ善ノ政ト可レ見ル唐ノ鑑ト

良ノ民ノに君の澤と被つレどハ罪ノ人ノのそ宥ハらハ
是レも亦仁者の慈悲よりあらわらぬとりりりりりり
やハあらわらぬと嘉穀と言ふたとりりりりり
とりりり

○ 甲ノ圃トと東西ノの俗とりりりりり福ノ門トと畫ぐ

やと人らの言はるるに
るほそりひらやもまうりし
も

田面轉語

屠見

は多と呼牛馬の肉と屠を毎にけぐるき
多きゆ穢多を盡とらあり是附會とそく
ゆるはたみとはとりと訓す順和名類聚に取
鷹雞餌之義也云云はたはとりの轉語也たと

通スリジ 略スル也

鞞

ありがいと讀りて車鞞あり字義に存以制^ニ半^ニ後也と
云り今馬具をそらとらぐら^ハ和名にさうある
とありありぐけの轉語也

鞞

むちぐらと後是と亦の牛の具あり字義
靴下絆頭繩也とありむちぐけとむちがきと轉
逐にむちぐらとらある

寄居子

かゝると讀、却其鈔に力か、あつり食りかきあ
 蟹、螿あり蟲、あつり食り蟹に似て殻ハ螿のさか
 ゆへ也か、あつり轉譯のそ

按、ごらんと殻と一他の字殻とつりて寄
 居ゆへ名とよむと一と海はし、のふたの
 引海進にそへつてあつり此、蟲と入つて
 ひとめれつ、殻とめけあつり、ふつて殻
 に入つては、**古入**おけ入つて、ふつて
 ちつて中、**多**、殻と蛤に似て對つと

しつては、しつて、**榮蟬**の編、あつりものよ、しつて蟹は、
 云、い可也又相思、あつり海、揺録、あつり、に螺、のあつり
 ちつて、中、實、しつて石に類、すつり、あつり
 ちつて、しつて、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
 醋、と、あつり、盤、旋、しつて、あつり、乃、蓋、あつり、崔、高、錫、が
 食、経、た、白、玉、の、蓋、有、と、あつり、**和名**、に、あつり、あつり
 是、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
 う、バ、中、實、せ、る、且、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり
 しつて、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり、あつり

おやまのりし〜ふ〜ん

今朝家様舞サレ一月のり民ちにも殿ツギの新橋
を云ひて寺に始ハジ先マ接ツと舞マシ〜む城シロぶらた

獨トコ畢ハヒ志シに東トウ音オンの土ツチお軍イクサ越コ困クム馬ウマ暴ヒコ卒ソツ也ヤ時

郎ロウ瓊ジュウ一イツ歎トクと〜〜〜馬ウマ鼻ハナと吸ス〜〜〜

馬ウマ起オキて躍ノボリ足タビ〜〜〜其ケモノ獸ノ接ツれ〜〜〜

實マコトのさる〜〜〜拵シノと馬ウマに〜

むぬハ其ケモノ故コト年トシ〜〜〜やさ〜ぬを今イマも

お〜〜〜たおの〜〜〜は云イハひそあそぶ
侍サマの

凡ソボさるの声コエにおびち〜〜〜きかぎ〜〜〜詩ウタ今

能ノりゆる陽ヒ関セキ意イ涙ナミダ痕アトと〜〜〜も哀アハレ声コエに感カず

あり今イマ吾ワガ俗ソクハ山ヤマ王ノの使シヤク者ノぞ〜〜〜の〜〜〜

其ケモノ声コエとあ〜〜〜ぬむ者モノあ〜〜〜干ツ謙ヘン公キミりさ門カド廣

厦ウチ多タ豪ウラハシ富トモ味ミ必カナラシ聞ク声コエ使シ自ミヅカ愁ウレヒと〜〜〜とあ〜

類ルイに〜〜〜朝アサ回マヒ暮ユフのあにほび〜〜〜ハ祖ソ公キミが

術シユあり〜〜〜れたき断ツグ賜タマヒれ声コエと〜〜〜た〜〜〜

き〜あそハ貪クサマ羊ヒツの頑ツル接ツに等ヒトシ〜〜〜から登ノボきよや

易イ道ダウ篇ヘン 乾ケン 讀ヨミ易イ三サン折セツ三サン戒ケイ

論語 韋編三絶
鉄櫃三折漆書三藏

素王之功曰素功 梅福據 讀書眼日月眼 山谷

公言曰誦言 高后紀 畫言曰索言 許后傳

違道之辨曰詭辨 石顯傳

失言曰墜言 漢書 和韻之言曰諧語 東方朔喜為諧語

飛揚非謗之語曰飛語 灌夫傳 一言必信曰忘然諾

被謗曰橫被口語 楊惲傳

以形似事言要玄集に凡へ傳々其二三を書記めそ

○神社にまぐ高麗犬と書べ〜と是より按る

高麗樂に狗犬と云ふ曲ありさ〜ぬま〜ぬの

名ハ韓のりあり

○今民家紡車につぎたる楯 俗語に〜〜〜こと

おあり何の字ぞ曰輪鼓の字あり

奉相撰記に比字あり細腰輪鼓の字〜

楯〜付る解のもの〜似る存比名ある楯或ハ

紡錘〜書なり

○今禪侶曰清話而心貪名利者似晋宋清談之

士嗚呼自稱正年乞士而被紫緋乘車駕食

禄使民乞士之名何在乎

ト部家唯と称する事と法華唯有一葉の
文にありと名法要集に後一條流宸筆にそ
唯の二字と書たものあり然るに林道春彼書
と疑て華延の作にありと云ふは按はるる
孝徳紀片帝道唯一と云語あり氏是こと
と云ふれけり

華延が神室圖と号する書一巻あり行法の品
おせしる是留合家の書なり

神前と宝前と云ふ事 江波第大御堂の條に
八幡大菩薩宝前と云ふ菩薩を号せしる
かゝりしや 御鎮座を縁に大前と云
ゆる御面と古記に云ふと神前と事也
廣前と私説に云ふあり

孝徳紀 盟言曰今共瀝心血
今人以此為起請文血判之事非也 是赤心と
謂故血判謀按東鑑無於起請血判之事
却以流血為起請之失 東鑑 二十三

今以指血點花押不知其始東記陳餘傳張敖書
其指出血按常隱是表至誠為約誓也以此為據
手但佛書以血為墨意乎

○神代卷所謂潮満瓊潮固瓊 口波 以為海神至室

藻塩草 の款に古人の授し由はしつるは潮
干潮満心ありりりとりつる本説とす

○蛭児 日本紀云水蛭児 日本紀者水字

梅とらにひるこを源氏物語にハ知あとりり
蠶の蛋と蛭しを蝶のこくに化しとありと

虫とら子虫の子ハ蠶あり 今田舎妙蠶や養ふ家

流すあり 蛭児尊と葦船にのせよりてて流す

とふと往古の俗語しそふの語にりた
まゝにさるゝとてやとらとら神代卷

上方の野俗多しとら今平とらとら理説
ふとら作者れ本意にあふれ周易も本下坐

の書ありと末にハ其理とれとらとら説
根本とらとらとらとら本義とらとら

曰に人したる類にありては名を尊とす
しと

○聖 皇 秀 吉 受 明 主 之 封 今 其 号 知 者 少 也 封 云 順 化 王
直見圖書編等之書

○ 神道の字我帝紀と考るに仏法に對しそりて
れと後の世のことしそりて秘訣と書かざりて
ゆべたは傳語かそのみちとそりて漢字に
しるすりありとそりて人なりむとありり
神道とそりて字に因りて我帝紀と今り

意と違ふ事あり帝紀に神字に解そりて神の字
と秘の字の意にんるる古人より神家のよりまは
名自にんるる王妙加持經とそりてと書作し四重れ
密意深秘の傳ありとそりてと書とゆいあり
と決とそりてふからんと神道とそりて却とそり
あつての事ありり神道とそりて人備の天路と
行賤とそりて掌理ありり神の字と付て又人備の者
ありと今れ神の者のまげと辨化のいふとある
事ありり書かぬるの字とそりてと書

意味異あり只中世より佛經を佛の尊タツマまかぎりと
美くする人々ありは佛書に多く神なる思議
ありとくく文字よりそのいふありとて入て
たり神家の佛法と擧ぐるハ五十年前
以来のものありそのいふ書と儒書とを
に受くそ神社の事とたたくやうくあり
あり儒佛の異とてそのいふ近世宗元明の
書書は其の家と興ウツクとてそのいふあり
昔我々儒者として人々の眼とあく

詞章とて大書とたのむる況や神家とて其の
今の神書と解人の言はらとて其のいふあり
あり

④
ト部派行事ウツク神道護摩宗源行事十八種
道と三科サンカとて三三とて三檀行事
とてそのいふあり其の神を権頂クワンテイ神たるか持家と
とて秘するあり切紙とてそのいふ法と猶
多し巫祝とて世俗とて神たるの行事
多しありとて其の書タツマびありとてそのいふ

夫^レ護摩^{シテ}灌頂^{シテ}ハリとより浮屠氏^ノれる宗源行
事ハ密家^ノの兩思^ノの本字^ヲと監^シ十八^ノ神^ノを
十八^ノ神^ヲとより今^レ化^{スル}事^ニあり又三元
三妙^ノ三行^ノと道^ニと用^セハル事^ニあり
兼^テ俱^ニ心^ヲ用^ヒハリと^ル事^ニあり
事^ニハ^シと^シテ^モ佛^ノ教^ノ道^ノの^ニハ^シテ^モ
わ^レの^レる^レあ^レる^レ事^ニあり

神代傳^ニハ^シテ^モ今^レの^レ事^ニハ^シテ^モ佛^ノ教^ノ道^ノの^ニハ^シテ^モ
妙^ノ三^ノ行^ノと^シテ^モ道^ニと^シテ^モ用^セハル^事
兼^テ俱^ニ心^ヲ用^ヒハリと^ル事^ニあり

○正月^ノの^レ鐸^ノの^レも^レゆ^レづ^レの^レ事^ニハ^シテ^モ佛^ノ教^ノ道^ノの^ニハ^シテ^モ
拙^クと^シテ^モこれ^ノ三角^ノ柏^ノに^シて^モは^シテ^モ出^スる^事
本^ノ堂^ノ會^ニ式^ニに^シて^モ見^ル事^ニあり又^レ餅^ノと^シテ^モも^レ數^ノも^レや
枕^ノ紙^ノに^シて^モハ^シテ^モ十二月^ノ晦^ノに^シて^モあ^レる^事
又^レ書^レハ^シテ^モ祝^ノに^シテ^モ用^ヒル^事侍^ル又^レ問^ニ雜^ノ者^ノ古^ノハ
ある^事と^シテ^モ白^クと^シテ^モ在^ル事^ニあり又^レ羊^ノ滑^ノ海^ノ藻^ノ等^ノと
齒^ノ固^ク用^ヒと^シテ^モは^シテ^モあり又^レ女^ノ人^ノの^レ入^ル事^ニあり
今^ノの^レ雜^ノ者^ノあ^レる^事と^シテ^モは^シテ^モあり又^レ臺^ノ上^ノ家^ノに^シて^モ
と^シテ^モあり

神皇實錄トヨ豊受宮頭注引シラカキ裏書曰トヨケ豊受我國ナント名云

按以スミラア辰国為我古名トケトケ辰与受倭訓通辰国瑞穂シラカキ國之意瑞穂百穀之謂也

神宮雜例集曰太神宮シラカキ至東南西深山無有人
宅北限宇治川者其程去宮一里餘此内不住人
宅禁制尤嚴此則為御藥穢事也云

今シラカキ宇治橋の内子良の鋪れ也シラカキのそ死せし家
長シラカキとる古制にも違ひ侍るものやシラカキ

人のゆゑ多しとの神話シラカキ山名富とたのふシラカキ
いしほシラカキ

歳徳の方と俗に忌がとらふ吉方と書也伊勢守記

寛正六年八月シラカキ今シラカキ朝川殿夫人産の所に入らる
まるととよむいほシラカキとよむのまると徳とシラカキ

人の誕生の賀シラカキ或はま賀シラカキ 三平より賀山に
甲より賀せ

あこと異邦こくに祝シラカキゆる凡々年賀にシラカキ
軸シラカキとそりたること又他々シラカキ袿具に仙人麟鳳シラカキ
宝貨の類シラカキいと繡シラカキ多々と其氏門よりたたり

又朋友のぞと贈るは
とて詩を化して
ゆゑに我邦に
ゆゑに我邦に
後魏に天皇の四十九の宝章と
右后の侍壽詞より
下
故夢
つゝ

らに千とをれ
おもむけ
しきか

○ 或人曰、渾水 燕談云、魏美公 賁 死、雷州 喪 還、過
荆南 公安 縣、民 懷 公 德、以 行、挿 地 掛 紙、為 祭 楚、
と我國紙幣と曰、
似、
本朝昔楮皮と
ありこれと

本錦とて串に捕て神にあり
遺風に白紙と串に捕垂るもの
紙と掛くは日くす敬神の執
とてその公其意異あつるもの

ミラグラ幣の字の訓に用由神布坐あてテハタへの
切テ也夕へと布あつるありニギテと
和布の坐あて坐とを千坐置坐乃意あ
して置あつるもの也

○万葉集に玉串に神賀玉の樹乃鏡垂り

神の御備へはは哉

以歌をそら月門松に神侍取付を門神と紀る
事成りもや登りたり玉女おは松と樹と
りあつて古書にえり

○大家元服の付ゆきつらあつるもの
あるまにや 日御杯とすあまのつらと
ゆきつらと丸く海と鐘に朱汁と入
て臺と指て理髪の盆と水の具あり又赤乱
水箱といつ物やり 湯氏お禮あつるもの多し

まろりとて櫛笄おろけにたり今婦人の様
ふと入ふとてこれ糸とてふ物よとてたま

源室六時礼讃念仏の声と哀しむるあど
人の信を教さふらんた免あり然るに元亨親書

鄭衛れ来韻なりとてしり六條の内府若野
中鏡に兼久の乱前より以声人始る高者なり
果しそ世乱きまらるるあつたれ侍る

平祝の妖言を禁じたまふに弘仁三寺九月廿
六日れ官符に足たり類聚三代格第一に

○ 日本紀 徳稱 黒紀白紀 能 御酒とてくる紀ハ假名書也

酒以ぎとりし事 又ハ白黒お沸酒とハ水享
二年十一月の康富記に云醴酒也白者有其色也
黒者上聊振鳥麻粉とけり

○ 卜部 兼右 神祇 正字 云仲哀の御令見屋命

十世お孫 伊弉册 サヤニノミコト 命其子 雷大臣 イカサチ に 卜部 ウラベ の性
賜と ト氏 タラ ハ我家 謗えくくるとも 也 此雷とハ

非功紀 ナカトミ に 所 謂 中臣 鳥賊 津使 主 と 子 人 の

事あり 雷ハイカツノ
假名也

山人大臣にあらず夫しり終の始ハ五代實錄ニ云ク
壹岐嶋ト部是雄出有雷臣命とくく是雄
より始る事ゆきけり又常盤大連中臣
と改姓ある事ト部家ハ本姓ある事とある事
とつる事一中臣ハ古より乃姓あり其の字を
付る事ハ清麿始り一由續日本紀神護景
雲三寺の詔に及んきりこそ今吉田のト部ハ
神祇官のト部あり神代よりハ氏名部あり
古語拾遺等と考へんべし

○或人問元三大師の謚ハ其徒の妄説と如何曰林業略記
五に永元丁亥三月十六日定故天台座主大僧正良源
慈惠大師之贈云抱ハ朝廷既に謚号定あり
事ハ明あり一又仁和寺益信にと奉覺
大師の勅号あり一山門の訴一とあり
此一由日記にあのハ考時謚定をうり
はそ公に号と賜事ハふりし
近ハ後水尾院隠元ハ大光善照國師の
号と賜事ハなあり一稱せざり一元録云

に訂りそゆく号と弘く志る所あり思ひ
あはせ給なり

○中庸章句獲機檻也

機とあやほると讀檻とたばしと讀俗儒

の訓あり二字とそなせおめことあざ訓せば

可あり天に檻とたりと訓

機檻とせんばあると訓せりせんばあると

我とばあらんばあらのあつと訓すべし事あり

○万葉に録と八十一里賦と十古と書類に皆

かあぐきなり

今の俗疫病流行の時森と戸にけけらゝ如何

しそ見及び侍ぐ他五辛盤と書

始はのわけけらゝ陰邪の氣とあふなり是

是はや幸なあらん我日記に

本武尊足柄の本を食師糧志

はり山祇振神に森とを彈きけ

あはせ給なり是山森の瘴邪

あはせ給なり是山森の瘴邪

除くの中なりとぞりけるを傳くも陰使れども
にしゆるみやほ古書もさかん人になつぬべき
こと

手書清行 昌泰四年勅文曰上古之事皆出傳
代りまゝに遺漏有遺漏云

家父文字と名へる字も名物天皇の時の始る
朝野群載に匡房の管山宮記と引そけること

尾張 尾治 小張 小張王

日本書紀第五天孫本紀作尾治

古事紀下 小治田王云云 小張王云云

日本書紀第九帝皇本紀作小張田皇女尾張

皇子日本紀同此

新撰姓氏錄三左京皇別下治田連 關化

天皇皇子彦坐命之後四世孫彦命征夷

有功効因割近江國淺井郡地賜之為墾田

地大海真持等墾開彼地為居地大海六世孫

之後能田官半等因行事賜治田姓也云治田
即墾田也 又有小治田連

按尾張尾治等皆段名書而小墾即實字也
又按字書謂墾治也則小治亦若實字也
蓋言小墾開田圃之地矣日本紀第三
卷余彥天皇紀有大倭國高尾張邑名
又按國造本紀有新治國云是今常陸
國新治郡也是亦曰新墾開之地也

○ 杜子美詩曰山鳥幽花皆交子 又子謂兄弟交同友

韓退之詩曰誰謂詒厥無基址 詒厥謂子孫

○ 天神昊天上帝日月星辰司中司命風雨也人
鬼先王宗廟也地祇社稷嶽林川沢也天曰祀鬼
曰享祇曰祭皆天子諸侯之禮也今士庶妄為
祭祀譎神佞鬼世祠官者如道士以祈禱為業
支伊勢三姓祢冨曰非巫覡是朝家之官人
而周禮大常之屬也凡我朝有神祇伯大小輔
等之官又奉廟官委見神祇社祠官
亦古昔不如今日也

○ 今我邦神家曰無上靈聖者道家之言也按經籍志呼靈寶道經二十八部如大靈寶護身符籙靈寶祈謝天神儀靈寶安宅齋儀是也又按以太上變無上亦出道經矣

○ 尾州六地藏第一中嶋郡一宮劍正寺第二丹羽郡小折常觀寺第三熱田簇屋成福寺第四愛智郡鳴海如意寺第五海東郡根高村地福院第六中嶋郡清須長光寺

○ 春秋內事曰日者院德之母也

信景按本朝以日神配女躰固有故

○ 淮南子云月天之使也

信景按神代卷一書說下日神以月讀尊遺下土蓋取之

○ 文昌雅云軍中以端午走馬謂躡柳信景按我邦競馬走馬是也

○ 潛確類書云榜葛刺國古天竺國也又名金剛座國乃釈迦得道之所永樂中嘗使詔謝其王

山神

地鏡曰入名山必先ツス五十日ス棄白犬抱キ白雞シ

云云味味到山百步呼曰林々夾々此山玉名云云

按吾邦如富士白山阿曾等是其地鎮山神也

今大際浮屠氏祀之入山民庶庶戒而謹焉

然不免季氏之旅太山非礼耳况村落号

山神者皆小祠而民家私祭也若我尾列

一郡中山神数十祠淫祀非礼を甚シ嗚呼

○或人问我朝家飲食と后下に賜とセ念念

よけ言何此中におるぬ予曰何の事にカ

半浅学なれハ答へり予志ト比藏經を轉

セハ弥沙塞律と見傳りにシ

あり女見人多ク謂是節會節當有飲食云云

若此等りや出所所なれり猶猶佛典典云云と

りり後日後沈沈とといひ傳り

○羅必曰元氣之所運始始于子子立立于己己子者字之

始而已者包之始始自子推之男男左行左三十十而立立

于己女右行積積二十十而合合之己正陽也陰實

從^レ之^ニ三天兩地自然之教也自己而教^レ之男十月
毓^シ千寅^ニ女十月毓^ス千申^ニ為^リ三陰^ニ寅^ハ為^リ三
陽^ニ云^ニ編^ニ代^ニ醉^ニ按^ニ伊^ニ二神^ニ在^ニめ^ニり右^ニめ^ニり多^ニひ^ニと

○和歌の三神ハ何れ^ニ乎^ニに初^メて曰^ク神代傳後記及^テ
諸神記に依^レれハ和歌ノ三神ハ任^ニ吉表^ニ筒男
中^ニ筒男^ニ底筒男^ニあり人丸赤人^ニ夜通娘^ニ何れ^ニを^レ

○曰^ク是^レ或^レ歎^ク也三聖と^レい^フ
歌書に式神と^レい^フ名^ハある^ニ式伏と^レい^フハ何^レを^レ
ぞや曰^ク是人^ノ形^ノ識^ニ神^ニ也巫蠱^ノの妖術^{アリ}古^ノ記

母式^ニに厭^ニ付^ニと^レい^フ是^レなり^ト本^ニ身^ニ代^ニの^ニ人^ノ形^ノ
より何れ^ニを^レい^フなり

○同^ニ稱^ニ異^ニ神^ニ

倉^ノ稻^ノ倉^ノ三^ノ神^ノ玉^ノ依^ノ姫^ノ命^ノ三^ノ神^ノ賀^ノ茂^ノ

媛^ノ許^ノ曾^ノ南^ノ宮^ノ賀^ノ野^ノ

丹^ノ生^ノ中^ノ山^ノ石^ノ上^ノ

此外^ニ指^ニ多^ニ矣^ト今^ニ録^ス其^ノ一^ニ三^ニ

同名異人

倭^ノ姫^ノ亦^ノ人^ノ

山城 大和 紀伊 出雲 大和 備前

孝吳帝ミムスノ女二人 孝元帝ノ女一人 崇神帝ミムスノ女一人 車仁
帝ノ女一人 開化御宇一人

八磨四人

柿本玉午羽栗賀茂

小町二人

小野玉造

清磨二人

ト部和氣

崇道スドラ天皇二人 尊号也

舍人ヤドノ親王 早良イヤ親王

行平三人

有原橘一人ハ鍛工也

犬養イヌキ二人

一人ハ木友ノ乱ニ死ス一人坂上ハ大國ノ子也

豊成二人

横佩ヨコヰ 石川

千方チカタ二人

一人ハ天智ノ御宇一人朱萑ノ御宇

乙九二人

藤原 大伴

仲九三人

大伴 惠美 阿部

藤夫人之稱二人

房前女 武智磨女

東人二人

大野 良峯

麻呂二人

藤原 紀

元方二人

一人菅根之子 一人棟梁之子

是等類又多矣又於姓氏別如藤原一神別

鎌足之流一皇別表米之流也尾張連小豐命

齋尾張部 亥八并耳之後也同性而又有嫡庶

之分若夫源氏代代皇子賜姓則多為源朝臣

天道神

我亦波郡寄木村有此社實武所謂
稱買神社也

本浮屠氏稱天道大日而祭日輪ト郭家以テ天道ハ

漢唐氏之所号諱之為別天神高皇產靈尊者
附會也世小黠コカク祠官見旧事紀コトワケ為天道根命者
據天道之字又附會也晉家以牛頭天王ウシノコ充之者尚
矣然無本據則不足取之只以漢唐氏為本而可也俗巫
或書天頭而強為說非也或人曰神明天道非異神
但依勸請故異祠号造祠亦有故習云是亦
後世好事之說而往古無此說凡造社之制出陸龜
勅宜無天道造也

後漢書光武紀東夷倭奴国云奴の字奴と讀登

くすのくと讀べし奴ハの音にもし神代卷
際此云斯奴と云ると似て為る倭此国と
いふ事なりと云く先を倭言に以て

○黄氏曰原廟之遊衣冠始於孝惠之飾非叔孫
之舞礼云云光武則園廟有祭命守令代事
魏文則別殿有祠用家人之礼云云唐之祭或至用
秋氏宋祭或至用道家云云東景
神と玉串と云ふ所の書に云りや曰和歌に玉串
如葉と云ふりさうなり永久勅使記小

外宮神事官司祢宜等取賢木一枝謂之玉串
内宮取玉串二枝ハタケ

○圖書編云果草廬云云或人曰馬毛之旋如星點
之圓圈者曰圖龜甲之拆如字書之縱橫者曰
書是也然傳自希夷者圖書皆圖圈何也曰
方技家之取用不逾以其數之多寡而已故其傳寫之
也通作圖圈取其省易耳但曰圖曰書立名既異
二者自應不同若洛書是圖圈則亦圖也何以謂
之書哉草廬此說似亦有見云云

私曰此說人所忘也然則河圖の等洛書の也
學者此亦不可不知

○曰食一定之數也秦漢以前皆黃能先知禮諸侯旅
見天子入門不得終禮廢者四曰太廟火日食后
之喪雨霑服失容則廢丈夫火也雨也皆不可先定
也當時視日食亦楨此耳使先知之則當預有
戒令朝不必入矣云云

○我國世々稱号と傳て教人一号あり多し大己貴命
ハ素戔嗚御子なり其子孫皆大己貴命或大國主

大物主といひり業神紀に大田田根子命の父阿田賀
由須命とも大物主といひ神代卷に八嶋野命は
六世代大己貴といひり志々せり姓氏録と按
むるに大田主ハ姓はて大物主命の男久斯比賀多命
此後何れあり然バ代々大物主の名るる
しるあり又天穗日命と出雲建子命とも櫛玉命
とも或ハ伴勢都彥神とも号す素尊此御子
ありしと天照天神養ひて御子と志たれり
然るに神武天皇の御宇伴勢都彥伊勢と

神武に避しり伴勢風士記に以り是ハ又世
同稱あり其外神武帝と火火和見号と稱し
宇摩志麻治命と饒速日命と号せしり
皆旧記實録に出たりト部家長壽と以て
説とるすとのハ非之されとも倭姫命武内臣等
長壽ありしハ紀に足之傳り
○ 柳筈定好寸方あり其すゆり此に應りて
仍り魚沼事と但武人此傳史に應一尺五寸横
一尺五分足の事と云々此未殺冷泉家には

すべて重と用を王系教にハ昔より制
用を山より重と用ひたふふとぞ柳筥
かといハ柳のりそとあといハ紙
あしあといとつけ物に今もなそ柳と
用を信々僧家納経に柳筥ハ其に
よく信々硯筆短冊ハさるり冠とも
鞠句とももむ侍系

○ 或人問^テ依^テ所^ニ生^ル年^ニ而^テ定^ム衰^日者^ハ出^ル何^レ書^乎曰^ク
獨^ニ不^レ衰^日有^レ衰^危壞^等宿^日見^ル不^レ空^所所^レ託^文殊^師利

菩薩及諸僊所說古山時日善惡宿曜經序三九
秘宿品第三此經竊陰陽家者流之言為天竺
之說甚乎浮屠氏誣人清順治十八年徑山僧
不^レ微^レ開^レ持^レ行^レ世^ニ我^レ往^レ昔^僧空海請來此經與清
本同乎否乎未考之

○ 明梅純損齊備忘錄云火浣布蓋金石之屬其
縷若金銅鐵絲網入火不能遽化一耳

○ 郭守敬說古日舒長今日漸促此義在^レ度^ノ數^ノ
之外無傷也不可以語泥者每百年短一分也粥熊

日運轉無^レ已^ル天地密移^ル疇覺^シ之哉 野記 祝元明作^ル

草李

曰^ク夷狄華夏之其俗不同者由^ル風氣異也^{コトナルニ}狀貌不^レ同者由^ル土氣異^{ナルニ}土奏^ル則人奏^ル土惡^ル則人惡^ル是之謂^フ風土^{ト云}風土之字固尚^ニ矣

山帝 山跡 八間跡 大和也

石葉如此書之皆假名字也近世有^リ考^ル古記書^ク山外者實得^ル之但石葉以宿書^ク屋前^ト然^レ則可書^ク山前^ト欽蓋對^ス山背^ト而謂^フ之則前^ト字有^ル故耳

○或人問俗間傳^ル所酒^シ願^チ童子其の四代^{ヨリ}比^ビ日^ノ旧記^ニ比^ビたり^キあり^キなりと^シ見^レたり^キ丹波^ノ國^ノ籠^ノ宮^ニ明神^ニ源賴光^ノ幻術^ノ凶賊^トと誅^スと^シて^シ時^ノの願^キあり^キ俗^ノ傳^ル所^ノあり^キ是^トなり^キ彼^ノ形^ノ字^ノ寫^シと見^レたり^キに^シ正曆^{三年}三月二十五日^トあり^キ賴光^ノ以下五人^ノ比^ビ花押^{あり}あり^キ正曆^ハ一條^ノ院^ノの^年号^其三年^ハ壬辰^{あり}なり

○又問俗^ニ八百^比並^尾の影^とて^シ小兒^ノの守^にを^しれ^るあり^キと^シて^シ何^人ぞ^曰ク^ハ八百^姫明神^のなり

句り祠ハ若碓小濱に句り娘此歌に

若換路や白玉椿八子代孫又も却る之矣ヤカバサカ

其縁起ハ實に妖妄の事あり

丹後国与謝郡比治與井原豊受皇太神始鎮座之

地而竹野神宮是也今呼河守之地号外宮者其

旧跡也又半里許号内宮祠後山有岩窟俗稱

岩戸傳云皇大神始降此山頂宇良嶽云云

梓往年至其地人所語記之耳

呂氏春秋三三月紀桐始華テメグムト高誘解曰桐梧桐也

是月生葉故曰始華云云

按梧桐倭俗所謂青桐也青桐固無紫花陰開

紫花者非梧桐又華義也曰美葉稱華葉

寛永改元年僧桂菴作家法倭點一卷教其

門下彼奉四書五經新註目曰諸家之說違比月

晦庵之義者皆不敢取也又曰善光院殿御代渡

唐船雖載新註來教林不事本書故不辨新

古之好惡又曰稱儒字教授之師者至今不知有好

書徒乾大唐所破棄之註教誨諸人惜哉後

未若有志本書之學者速求新註書而可讀之
此三條似知我朱子者然其實不過弄新奇
耳自中世以來朝家裏堂上無講學之人
於此禪家有文字僧多事文筆故棄經義
取文詞徒專記誦訓話而已近世稱佛者而
講經書者習之尚矣

又曰東福不二政陽和尚初講此書凡正本國
傳習之謬以便於叢林說禪宜於士俗也語
為要而已云云

以此一條直鑑當日所以學經書者以新註之
書使說禪俗語則豈知有脩己治人之道
今日俗儒雖口說異端之非而其意指師桂
菴訓話却未免古注訓點餘習則不及桂菴
者不亦遠乎近年小崎敬義先生捨旧習
而發揮道學改訓點而誨蒙士可謂近古
一人也然世僻儒曲學未知之或雖適知之而猶
執固我之私不學之實可痛之甚也

叢林家作詩凡二字題者詩中不謂題字此初

有道号之頌不謂道号字者後雖雜物品題而亦不謂之是固不詩家之故唯叢林之流風也

穂積元菴見難波僧龍溪所聞也

居士と稱するもの居位の士あり居徳の士あり居財の士ありと釈氏より是居士の字により後世の附含るる居士ありと礼の玉藻に居士錦帶といふあり注に道藝は處士ありといふ又吳僧能が改春漫録に居士の号商周比時起也といふなり韓非子と按るるに周乃時居士任爵

華仕といふ昆弟二人ありたりと云々あり夫居士は不仕の号處士と同じき事なり鞍井録等成考く見ざる又仏事といふと在ハ小生將軍長者居士寄官婆羅門等此品と云々今王侯卿士といふ名分に在るる古老口實傳云々大小神祇使者狐鳥鷄蛇龜是則五官主夜叉神也故示吉凶者也云々

按是漢唐氏所謂而我国祠官傳習之以為神社之故

天^{キヤウ}飛^{キヤウ}星^{キヤウ}秘密儀軌三卷

大^{シホ}湏^ス真福寺藏本龜山院文應元年古本

字也應永三年十二月七日於尾列仲嶋郡

大^{シホ}栖^ス庄^{ヒカミ}東^{カタク}方照光院書寫早^ニ云云

右儀軌中有天王縛擊凶鬼禳除疫癘之

事又有沙羯羅龍王第二姬為牛頭天王之

妃說及十二神星之名按世於天王祠禳疫者

不出此儀軌然密家秘之俗巫忘本而一為我邦

故事牽合素盞烏尊元祿庚辰夏六月二十日

見彼書故書以備遺忘耳

都表如意輪儀軌

親氏曰待行法有此儀軌今平祝為日待者固

習浮屠之術而失其法矣嗚呼方士自

一犯祀日浮屠因襲而以為己家事我邦

諸社祠官等始傲彼又以為神事以此為

業誣民釣利僭亂之至實可痛哉

百葉集 雜字の 抄

味酒三輪 一平城此酒造るは下り有り
酒より作りし痛の 渥積而ニ 袖ひらてり
いんあまににんえ びつら凡音使也

梯田部 鶴鳴渡 年魚市 方埴干にけし
鶴鳴渡 我尾張の名所也

不 怜 俳 徊 神 樹 四 常 不 止 豫 將 有
白 風 草 花 吉 魚 灼 然 露 發 田 壑 標 繩
白 杜 枋 云 者 用 木 代 山 柳 也 玉 鄉 音 惻 隱 入 風

或人問 硯紙と納々紙と文匣といふをを
訓をきく答ふをくす道生八牋の十六に文具
あり其に倭式と称美す文匣ハ具の字と略
よ々の文房器具の匣といふ事あり

宋景濂集 日東曲注云其国購得諸書悉
官刊之字與此同同但讀之者語言絶異又必
侏離順文讀下復逆讀而上始為句所以
文義雖通而其為文終不能精暢也云云

按 我國讀書有字音有和訓直讀逆讀而後
得其義故比異邦讀書者則不其只勞耳又誤
文義者不少學者深理會字義可也

問伊悌ニ神之御子也稱ニ女ニ男出何書ニ乎答
神祇本源所化篇曰生一女神三男素盞鳥尊云云

又問世謂倭琴神代以弓六張彈其弦也是出何
書乎各神室日出秘府曰御琴神余鷄命
長白羽命用天香弓六張叩絃供吾音
今世名和琴是也

讓と謙と固に為厚兒事乃々淮南子
所謂者吾繞が美妻と我兄に讓王續博物志
に所謂黃公已が女と謙々醜と云々嫁
々々々々々々皆偏愚の事と所あり

○ 本朝以西域之神立祠祭之者若牛頭天王社

辨才天社吉祥天社妙見社等是也以漢土之神
立祠祭之者若山王社赤山明神新羅明神
泰山府君等是也我邦人以是等為素盞烏
尊為大己貴命為倉稻魂之類甚多矣以天照
本神為大田以八幡為彌陀類則人皆知習合家
作為之而不辨若牛頭山王等本異邦神而以
我國神牽附之与本地虫跡之說為表裡也若支加
富土住吉等者本朝地祇也然諸国立其社祭之
雖不異邦之神而亦非礼耳

〇内宮御正躰シラガクニルヤ為八尺鏡入皆知焉外宮御正躰其所出知之者ナリ按御鎮座次第記靈形金鏡神代靈物而道主ミチノミ貴所齊也トヨ豐受御鎮座本記說同之道主貴吉佐宮此金鏡奉號天津水敷又按外宮相殿皇孫尊靈鏡瑞器記菅不アハ合尊製作也云云又按次第記午力雄命御靈形乃座豐秋津姫御靈形釵座兒屋命御靈形笏座太玉命御靈形曲王也其他別宮御靈形略之或人問諸社ミコト重此御箱也御靈形答然カ神名秘書

此註曰裏書曰諸社宮号と授奉承四神賤靈物と以テ神祇奉宗例也ト云云是と以テ知べし以テ八幡号宗廟者後朱雀院長曆年中也神祇奉承清輔真義抄曰三輪比明神と云て祭れ日冬ノ荒と云作マて岩の上ニ垂シてク是御祭也向リと云ク百也集小三悔マ之祭祭神カミ至ニのといふ是あり

〇日本記と按ヨりテ瓦カ菅の製ハ齊明帝の附朝儀ウりシ續日本紀ハ聖武帝の時ナりシと云フ

瓦舎の構カマ（赤白の塗ヌリハ始ハジリ）と造ツクリより茶チヤと
板屋草舎の造ツクリりしを今イマは仕官の家ハ更さらなり
市井のままりて瓦カガがさ聖ミヤコチ塗多オホかる人の心驕ウツクを
とさと事コト火ヒの燥カハ々々に造ツクリりて甚シダ

○
太チ神宮の千木チガキ堅魚木カトキ心御柱ココロミナ等ハ神秘口訣に
して他家イタ知チる者モノ不レ能ハしものり但レ延暦ニ太神
常儀式帳ニ上チ標風肆ハシ枚ハシ長チ八尺ハシ弘チ号チ稱ス比木釘覆
大チ垣チ堅魚木カトキ長チ七尺ハシ徑チ一尺チ七寸チ材木チ別端チ以チ金チ鏝チ云チ然チ延暦
以前チより金チ鏝チれりありと見チたり神宮雜事記

此説に後朱雀院長曆元年の勅チ也チ堅魚木カトキ尻
貫木チ左右チ端チ泥障チ板チ左右チ端チ鞆掛チ端チ等チ金物等
被チ奉チ加チ粧チと云チり加チの字チにて弥チ初チより金チに粧チ有チ
しハ云チは傳チる但チ上古質素の宮造り
にいくてわゆる華義のチものみんチや彼チ實チ基本紀
等神宮チ此チ旧記チに種々の説ありて其造制と神秘
すチる事チハ後世造宮の制も定りて造チる天地万物
に象チと取チりて造チり奉チる事チありたり
てあらんやチと云チは岩屋本縁に堅木と星チ為此

推化四列廻生の表示をどしるを専テ浮屠氏
の記るりりり豈に取ルに足んや心乃御柱ハ極テ
深秘と云心御柱記に謂ところハ蓋し稱辭と
以て争ふやせしにや神祇本源の心御柱篇を
御鎮座記と取ると説とるやしりのあり
是ホ皆其象としり上古ハ本義としりたは
ず。柳干木ハ豊受御饒記云組目上謂千
木組目利下謂博風云是即上代草葺の博
風ハ端と固たる木の之を括初て亦違多と

●
其より置し古風魚木も亦草屋の棟と固
違木と
云々
具なり今の俗萱草也わんとりと云ふ物とんそ
云々
草葺
堅魚の名ハ万葉にもんそればを
四也たる言るり。心御柱ハ太神宮式に地鎮
畢地祭ノ物忌清ノ掃其地掘心御柱穴禰直
柱其築平殿地云是即御柱立乃儀にして
柱と殿宇の正中に先立系ハ往古家造ハ遺習
只此中に及之ゆれ今日風俗も家作始先
柱立とて一棟の柱と立て千通祝すと初と

やうに顯宗紀に室壽シキに中に築ツキ立柱者此家長
御心之鎮也といふも造宅堅柱の稱タカク辞シり凡ツか
代何の象と取らなくともあつた處トコロ況シや秘訣傳
此事あつたや後世制定する其象と見て自
至理有ル事トといふもの多し或は其物成祝イハヒも
稱イハヒ辞シといつて後人傳へる秘ヒとやいふあつたや
且ツ陰陽家の地鎮祭チマツリに混マシしていふなり或は察宗
此地法に金の四柱と五色に縁ヒにて饒ニギハヤヒ已ニ理ツク事有ル
と附ツ合フせしといふるといふて四記ヨウキいふべき事

間マに及ヒつた所トコロ凡ツか中世より王臣及び神家まで佛法
といふ言コト出デるやいふ言コトをかく其中に流入リする
異イ俗ソク母ボとりの言コトもさういふ言コトをかくする五イ行コウ
といふも五イ行コウ大義等の説セツととり淮南子等チを
雜ザ家に説セツふ陰陽インヤウの言コトと其コトをいふ用ヨウ心シンに不フし
といふ言コトをいふ言コトは宋儒明人ソウニョウメイジンの二氣五行と
發明フメイせし趣ソツと取ツて取ツるはあつた言コトのさか
いへば昔イマ日神記所作ニれ旨シにたつた言コト多タし
いへば其本意といふて是非といふ言コトをいふ

鳥居ありと衡門あり 元享親書ニ 衡門あり 衡門 異邦の

華表に附會して猶其理ハ又本朝の故を以て

まていふを似げあり 下筆集及兼邦が西首抄 以来華表の字と附會せり

とるゝ通也といふハ安らりり古き 作

物終の繪に衡門に鶏栖 ニラナリ 所をけり

鶏栖の心もわけて ツボ 後おに鶏栖

と云ふハは ツボ 入りありのむひにて其

割又別あり 四書封相に鶏栖 我國神祠にとりおき

往古の門あり今も 此屋あり 村落にハ兩柱に横 ヨコ 木

と後一戸を ツボ 門あり是と以てあり

いふに ツボ 今華表は ツボ 尺々古風

と ツボ の説り判

彼岸 彼岸 西方浄土經に時正脩云の ツボ 説り

是其椽々曰彼經 ツボ 氏偽經といふ ツボ 如何 ツボ 云が

云仏經いづ ツボ 偽書 ツボ 我邦彼經に ツボ ありて

彼岸舎 ツボ といふ ツボ 十王經ハ佛 ツボ 經ニ

偽經と稱 ツボ 十王堂と立て施物と貪ル ツボ の

心腎尽タル ツボ 死ニテ久シキ人 ツボ 夢スル者ナリ

老人ノ當時ヲ忘レテ往古五十年於本年ノ事ヲ
能覚ヘタルが如シ

● 八專ハ壬子ニ入テ癸亥ニアク八專トハ三ツノ一ノ水ト子ノ水
トメグリアヒ甲乙ノ木ト寅卯ノ木トメグリアヒガヤウニ十干ノ
五行十二支ノ五行トツニメグリアフ日八日アル故之八專十二
日其日中四日ハ支干五行ノメグリニ外ル、故ニ同日ト云
犬牛竜馬之八專ハ五行一処ニメグリアフ故ニ氣盛ニシテ
病氣動ク又八專ノ明ル次日甲子之六十一日ツ、ニテ
六氣ノ替ル中ナレバ交ル氣騷クユヘニ病人ニアタル也

● 園東前ノ大園殿ノ代ニ敵ニ詰ラレ籠城難義ニ及ズ時ニ
再并ヲ取テ下知シテ云ク堀際近ク付タル敵ヲ鉄炮ヲ打
ベカラス堀際遠ク跡ニ續キタル敵ヲ急ニ打退ケヨト云云
此故ニ跡崩ニナリテ堀ニ近ヅキタル敵後勢ノ續カサル
ヲ見テ為方ナク引退キ木園遂ニ運ラヒラクト

● 或人云詩中ニ古事ヲ用ル、水中ノ塩味トヤラシイリ
一篇ノ章句輒スク聞ヘテ沉吟スレハ底ニ古事ヲ含メ
ソトカヤ

● 信長ノ士唐洲口集ノ物尺ニ出タル時急ニ鉄炮足本

近ク来ル康胤上ヲ振作ヒテ見ルニ一敵是ヲ計テ弥
初ノ自當ヨリ下テ打タルニ一康胤午シモ不負ナリ
真甲ニ近キ鉄炮ニハ足本ヲ見ルテ古人ノ傳ナリ
土佐ノト傳劔術ヲ一派立テ无午勝源ト号ス
大坂陣ノ時尾陽侯ノ所人殺ノ後備へニハ誰ヲカ可
言作付ヤト各中~~汝後志~~志~~爲~~爲~~守~~守~~と~~と~~友~~友~~を~~を~~後~~後~~備~~備
不可入沛不~~得~~得~~軍~~軍~~跡~~跡~~ニ~~ニ~~所~~所~~存~~存~~上~~上~~也~~也~~是~~是~~程~~程~~ノ~~ノ~~後~~後~~備~~備~~世~~世~~又~~又
有ベキヤト云ケルヨリテ後備ナカリシトナリ

鎗倉弓倉ト云云類々ノ倉ヲ取ト云フ鉄炮ヲハ

鉄炮ニテ防キ弓ヲハ弓ニテ防グト云云鎗床弓床
ト云居敷テ待テ以床ト云倉ト云歟

家康公ノ士井仔兵部北條カ蓋ル小田原~~ノ~~條~~曲~~曲~~端~~端
ヲ攻ル片自身橋瓜ニ押寄鉄炮ヲ打時誤テニ
重トシタル筒コ一裂テ指ノ股~~ニ~~ニ~~損~~損~~シ~~シ~~タ~~タ~~リ~~リ~~ト~~ト~~イ~~イ~~ハ~~ハ~~ト~~ト~~モ~~モ
兵部物氏セズト云云

小早川隆景ノ士ニ何某トヤラニモノ文字ニツイテ方
智アリ式時隆景試ノ為庭へ下リ木ニ腰シ掛テ
頭ニ草ノ葉ヲ摘テ置其名ヲサズシテ是レ持

来レトアリシ近習皆其意ヲ知ザリシニ彼者一人
急キ茶ヲタテ、持来ル人皆感スト

● 東康公漢松ニ居タリ少時由布四郎集乃若志の若アリ
白浪装束シ仁久門圃ニ立テく歌康公一ノ丈ナリ
トテ一首ノ歌ヲ詠吟ス

暖花ニ和泉河内^{カミ}の宿リテ金ノ橋と波スヨナケラ
四郎集乃若志一ノ尺居タル漢松の町と云テ八幡集乃
若志の内一宿と云テ若志を以テ覺多り四郎集乃若志
言上スト云云百日ニ當テ 秀忠公浄延生るる因ケ

● 列藩制の後天下の事を作進多ひて武州江戸に
在アリ市中賑クお大橋と波シ并會橋ト云モ出
事乃若志是と云合シりお泉河内のと云云
今忠公不存と云クマ知テ語リシガ云後大坂陣出
事乃若志謀ニ伏シテ後お泉河内乃若志のと云語
多形之サハ内お夢切テ宣信セニヤ智計深キ
事乃若志一と云云

● 尸 乃若志一と訓ス

● 心ハ氣と兼セテ氣ニつきて動き躁リ此ヲ物と

云孫之或又息はくく胸喘アツとの喘と息の
ころ正と

・大岡の所藩生飛澤寺百万と成してやん
あやうく浪八重と云ておまの出陣人玉英
一に深く溺るあ中の慈一人のあ敢に危か
とん世に一族は下と藩生四郎と云て飛澤五
万と云く急き聚候一上り諫テ不申して密に
茶湯にとあやて八重と振きお客に飛澤もや性
一人呼あて八重と甲あ刺殺一人のや性飯にて

子細に飛澤と云く飛澤も急怒く切腹に究りて
石田治教是と情とそ長大岡の詞と信てか花肥
後ニ秋ケラる。園ケ原陣シ支肥候が急キ上リシカ
風波ノ難ニ去の長方飯ニ忌是と歎キ又
肥候ニ飯り切腹ス

・桃路新作吾親奇宮ヲ筑紫の園田作重の三童
児の味うた也十三して始らぬはかて粗りり
作集のよ山下作殿と名ヲ啓か賀ニ飛りり新作
行てやえす十四ノ秋委越テ浪廣地へ出テ

果スニ作威と素柄陰邪化を刀ナリ殺てのち
作威陰を捨て孝行ヲ感之首ヲ切レト云ニ新作モ
亦一旦ノ思ニ感ニ大刀と鞘ニ治め相伴ヒテ飯ル
と云云 **棄**スルニ敵ニ仕ルコト、一旦ノ思ニ感
スルトと云新作ヲためお悖る

栗田形 天祐のウヤ性討死の 首男 女ノ兵知
くさうりした **赤** 赤 眼シアケテ足ル
腫シ上ニ足ノ一ツ **腫** ノ中一入て白眼ガカリ
足ノ唇ニ捨テと女人の首ニくさうり若シ腫

鳴ラカニ足一ツバ男ノ首タルベシトのなふ

秀頼と扱ニあり **赤** 神文ニ血判ナサルトキ
大老血出ウヤと お人ニニ付木村 門吉
そ そ 介錯の **わ** お 女房 密ニ者扱ニ針ニテ
血ヲ出といひこッケ 神文こッケ **長** 門吉ニ **涙** 赤 老眼ニテ
足ノ一ツ お 血ヲ出シて付 **目** の **な** お 女房 **と**
くして お 者 **名** 扱ニ針ニ **血** お 扱ニ **又** **ル** **は** 女房 **の**
入 **勢** 不可友扱ニ **栄** 生院ト云 **安** 藤院 **殿** お 水 **江**
頼 房 **彦** お 義 **母** **の**
大岡大坂ノ城 **お** 治 **通** 兵 **の** 志 **と** 志 **と** 志
とて此城の責ヤウヤ有 **ギ** **ヤ** **と** 同 **等** **に** シ

因之懸然タリ至存木園の云此城カ責をた
く一度扱とりけテ堀等ヲ埋テをよめりて
所御三つと云云家康云此云耳と留りて
柳ニ木園移せテ暮り秀頼のたむけのすふ
度一徳に秀頼を不及云一附くの者たを計中
臨ル事 神急の武徳人力のナス如ニアラズ
△八專ヨリ茲ニ至テ為人鈔ニ足ニ十卷アリ
其書タル粗朱子ヲ学フ一見一害ト
句トソト又意味もあざら

- 父屋康秀がゆくりの芳秋の茶本と定楽の茶
ためと述べて百人一首と書附古秋の茶本と書類
尺をどにらんはと地色の茶本と書一と或人
よりしがはら玉細川のまの康秀と名あり
との殿下御と書添あると地色の茶本とあり
- 木末清話云清水池在二僧列城東其中四季
荷花不絶臘月を盛
- 珍珠茶古不聞食晋宋已降吳人採葉
煮之名為茗粥

四種鎧 沛氏黑系鎧 平氏紫系鎧 橘氏
黃系鎧 藤原氏萌黃系鎧 朱雀院承平七年
依宣旨定之謂之家鎧云云 布衣味見其
所出之據而以兵家者諒之秘書記悉
建安張氏曰屯有君道故利建侯蒙有師道
故童蒙求我天地既位君師立矣 弗集成
愚按乾天坤地人所知而屯蒙之為君師
也先人未祭夫有天地而後有人必有上
下之分而始君道立焉君必治民而教之

以孝弟也君師固不有矣尊而為君之
親而師之易也貫天地包萬物其旨深矣哉
大辨天女頗梨天女等名出大集須弥藏經
滅非時風兩品我俗所謂波利采女者蓋頗
梨天女歟
天原癸微曰禹以水火金木土為序劉白班
固以木火土金水為序范曄以木金火土
水為序按圖書編以金木水火土為言
滑耀編曰輒誦曹顏遠詩曰富貴他人合

貪賤親戚離此固世路之恒執物情之常期
星提勝覽曰靈山與白城地連接其山峻嶺
而方有泉下繞如帶山頂有一石塊似佛頭
故名靈山

按与叔氏所謂者異矣今此說明永樂七
年太宗命鄭和王景弘等往諸番國親
以所見聞記之則以此眞實焉

○潜確類書五十人倫部三曰神器古傳天下者
神明之器也。班彪五命論曰神器有命不

可以智力求李奇曰帝王賞罰之柄也

謹曰我朝三種神器實王者保天下之器也
皇大神以神器授之天孫豈可以智力
求之武家後世虽執賞罰之柄而於名
位則不固固有故哉

○寢覺里 今東海殿之地之熱田之南地也

○表ヨサム里ハ言表の森の北の辺なりとぞ

○音聞の山ヤゴトハ事山の名なり

○松風の里ハ變向山是諸るの北の辺と云るなり

● 西院大臣、諸兄也。佐保左大臣、長屋王也。北边大臣、源信也。近院右大臣、能有也。小松將軍、信孝也。鈴虫、中納言、綾小路有資也。此等之称号猶多矣。

● 雞にホ綿とつて、國の明神に在る也。中納言にあり是も亦解除のまごあり。あつては、まごをくもあはれはる。

● 花火、吳郡般花といふ新裁万宝全書、二十四元宵ノ法般花方と多く載り又其十二

三絃譜式あり三絃格ハ即三線之然ども形を琵琶ニ似侍る

● 林氏神道秘傳折中俗解十三日天津神籬云云ト部ノ兼俱か子一人ハ吉田ノ神職ヲ受續キ一人ハ平野ノ神職トナル其後ニ中アシクナリテ諍論ニ及ブ吉田訴ケルハ春日明神ヨリ大職ナカトシ霜ニ傳ハリ夫ヨリ中ナカトシ臣意美麻呂ミマロニ授ラレシ神籬ノ正印ト云モノ吾家ニアリ一大深秘ノ物ナレバ人ヲシテ是ヲ見セシメズ吾家諸神ヲアガメ宗

又ハ諸社ヲ破ラシテ隨意ナルヲハ此神籬アルユヘ
ナリ然ル如ニ平野妄リニ新造ノ物也トハ掠申ス大
ナル僻ト也平野答ヘケル天津神籬ト云フハ
神書ニアレ何様ノ物アリ計カタシ故ニ吾先祖
誠ニ其ノ形ヲ作り見ントテ二條町ノ細工人某ヲ
語ヒ銅ヲ以テ假ニ是ヲ作ル昔ノ神籬ハ如此
アラシヤ覺束ナケレ神職ノ役ナレ其ノ志アリケル
也然ルニ神代ヨリ今ニ相傳ヒテ取持スト申ハ甚
偽ナリコレヲ新造スル子細ヲ吉田不知ニテ訴ヘ

申ナルニ若シ此妄シ知テ隱シテ申サバ及テ彼カ
家ノ耻辱シ顯ス也ト此外訴論ノ公案條々多
シ云云

信景按ニト部家ノ妄誕甚々明ナリ神籬
故別ニ秘訣アリ余難境向答ニシイテ詳ニ記
通鑑綱目ノ綱ハ是レ朱先生取筆圍趙訥齋請ニ於
先生之命ニ取筆也訥齋名師淵字幾道傳在ニ

閩書

春日井郡吉根村竜泉寺山ノ本名龍御山ナリ

衣笠内大臣の奇り

天は凡接ひはれてやむらん竜ノ佛山の夕立の雲

五十妻奇合

ちもやゆれ神のみむらのまよあまのけつたのあざと
神のみむらと神のまよあまのけつたのあざと
鏡と御てとくことま

射家有鳴弦黒札書甲弓国鬼明王等之字甚
不經之事也

神社の井垣と井の字に意にあは旧事紀宇摩志

麻治命奉獻天瑞室乃豎神楯以齋亦立今木
五十櫛刺繞於布都主釵太神宗齋殿内と
い(里) いづさハ今木の垣にして五十垣なりと

まね世継い(里)

形周氷曰木右為_レ危た_レ為_レ非是本と割_レさ
きら物といふ片を_レ字彙に_レ析_レ開木片なりといり
今の俗屋ぎのあ_レま_レい_レ片_レお_レ友と書_レま_レや
四月万葉と素袍烏帽子_レあ_レま_レい_レ片_レお_レ友と書_レま_レや
唱(侍々を)尾列_レ善白舟_レ本_レ濟_レの_レ長舟寺開山

平住を祠と作りて同至北勢郡市内村の民こ
あつてとらやまを祠を屋舎宮造のともありを史
めや物延正月又日東庭の千壽万歳ハ新ノ始
の次母乞と履とと録例あり

由氏六帖曰鋌神器之 七命曰神器化成ス陽文ラモテ

陰漫之
ウラアマナレ

本朝以テ鋌謂ニ神器ト亦有ル故レ哉

日本云ニ比濃茂騰有リ大日靈貴ノ号之訓傳ニ云々
見ニ文會筆録按ニ比濃茂騰者ハ比濃美ノ拳騰ト

之轉訓乎ニ比濃ハ比留米ノ之畧訓也
ニコノ切トナリ

妙音院相国勢田の社を弾ハ多ク琵琶と

白菊ト云今我 大公の宝庫にあり

東野大社を大政大臣の口宣宣方ハ野島日光
山の岡宮ニありをり長八子の征夷大將軍
路方牛車支院別あり及び大政大臣長者等の
宣旨八通ハ駿弱久我山の御庫ニありとぞ由
陽前集の九ニ云々あり

定家少家記と明月記といふを考へ住吉社ニ

まのぞらさるに汝を唯月うるといふ神を
しりて名付られたるを丹月抄といふ前
書あり侍れ

● 尔雅曰宮中ノ術巷ト謂フ之之壺ト字子酒壺之壺
不同倭俗混用非也

我邦ニ大衆の遊れつがの中といふはかきか
起リ多めや鼻筋つがのいゝ文を

● 幽列録曰郡城鳳陽門五層樓去地二十丈云
我邦城内の天主といふは樓閣カカシ之五重ニ比ると

矢射の割之新名樓言備戸之向有射孔樓

悽然也といふ射孔ハ矢が海之磯田赤津島安土

の天主ハ七重ありとや潜確類書に西城尾

婆羅宮中作七重樓覆銅尾といふは

● 擯鼻禪 見清人擯鼻禪如短袴今人以

擯鼻為男根名者非也足有擯鼻穴三里上

也禪至擯鼻穴故為名

● 雄略帝の妹魏文帝ハ裔辰貴といふ人投化
身なり是布給工ノ始ハ弘仁帝の妹百濟の

河成とつゝ盡工事りりるり〜純に及ぶり

見^ニ蒙古人之禱^ト而^ラ非^レ若^ク方士^ニ云^ハ惟^ニ取^リ淨水^一

盆^ニ浸^ス石子數枚^ニ而已^ニ云^ハ石子名^ク難^カ答^ト乃^チ走獸

腹中所^レ産也^云是^レ牛黄狗宝之属^耳

見^ニ南村輟耕録^ニ佛經^ニ似^レ之^者亦^タ多^シ矣^{異域}

以^ニ牛黄^ニ為^ス宝^ト為^ス術^ニ用^ル藥^ニ故^也

結果 近世異邦書多^シ此字殺戮^{スル}人^ノ之^レ辞也

見^ニ水滸傳^及柏案鴛鴦等^ニ

隋煬帝 ヤウダイト讀^テヤウテイト云^{ザル}ト識^者：

問一氏只ヨミクセトノミ云^ヒテ其^ノ故^テ不知^按ズル^{新日}

香紀十九秘訓ニ隋煬帝ズイハヤウダイト訓セリ

異邦世々ノ帝ノ中獨リ煬帝ノ名出^テ如此訓アル

故^ニ古^一ヨリタイト濁^リテ讀^{ナル}ニ日本紀多^ハ吳音

ヲ用^ル処多^シ

弘仁九年有^ニ詔書^一天下儀式男女ノ衣服皆依^リ唐

法^ニ五位已上^ノ位記改^テ從^テ漢^ノ樣^ニ續^ニ日本徒紀菅原

北卿贈大政大臣 房前 光俊朝臣^ノ書加^也

愛宮 九条右大臣^ノ女西宮^ノ在^ニ大臣^ノ室^中納言經房^ノ母

近衛^{ミヅノ}姫君 中納言^{ナクナノリ}帥^{スヂ}經房^{ノリヒコ}女

高松^{タカマツ}上^{ノミ} 西宮^{ニシノミヤ}大臣^{ノミ}女堀川^{ノメ}右大臣^{ノミ}頼宗^{タノムネ}公^{ノミ}女

典侍^{テンシ}藤原^{フジワラ}昌^{ノミ}朝臣^{ノミ} 典侍^{テンシ}国子^{クニシ}之

典侍^{テンシ}真子^{マコ}朝臣^{ノミ} 五条^{イツノエ}后^{ノミ}姫^{ノミ}女

典侍^{テンシ}給子^{キムコ}朝臣^{ノミ} 参議^{サンギ}音^{ノミ}經^{ノミ}女

三^ミ国^{クニ}町^{チヨ} 名^ナ虎^{トラ}女^メ

不^フ作^サ者^{シヤ}部^フ敷^シ母^{ハハ}足^{タリ}之^ノ皇^{ミコ}孫^ノ名^ナ有^リ也^{ナリ}北^{キタ}北^{キタ}郷^{キヨウ}と^ト北^{キタ}家^ケ有^リれ^レる^ル天^{テン}子^シ孫^ノ王^ノの^ノ女^メの^ノ卵^ノ宮^ノと^ト移^ヒ之^レを^シ希^ニ之^レ姫^ノ名^ナを^シ今^{イマ}之^ノ公^ノの^ノ女^メの^ノ卵^ノこれ^レを

不^フ稱^シ上^ノと^ト今^{イマ}も^モ高^{タカ}貴^キノ^ノ篇^{ヘン}中^ノと^ト云^{ハク}こと^トあり^シ女^メと^トて^テ知^チ後^ノ稱^シ之^レを^シとい^{ハク}わ^{ハク}づ^クり^{タリ}あり

日出^{ヒデ} 謂^{イハレ}王者^ノ所^ノシ^テ都^ノ也 以^{ヨリ}テ^テ日出^シ為^シ我^ガ日^ノ本^ノ之^ノ稱^ト尚^{ナカ}矣^{ナリ}

夫^{ソノ}飯^イ日出^シ主^ノ者^ノ出^ツ後^ノ遠^ノ表^ノ莫^ク德^ト歌^カ詩^シ謂^フ表^ト狄^ト向^ト

化^カ来^キ朝^ノ也^{ナリ}不^レ可^ク独^リ云^{ハク}我^ガ邦^ノ

栲^{カク}本^ノ唯^ニ神^ト 人^{ヒト}唐^ノの^ノ廟^ノ考^ノ考^ノ 玉^{タマ}葉^ノ集^ノ十^ノ八

宋^{ソウ}蓮^ノウ^ノ奇^キの^ノ言^ノ象^ノ也^{ナリ}に^ニ足^ル之^ノり^リ栲^{カク}玉^ノ唯^ニ神^トに^ニ大^{ダイ}唐^ノの^ノ祠^ノあり^リ正^{テイ}位^ノの^ノ外^ノ階^ノ之^ノ世^ノ俗^ノ人^ノ唐^ノの^ノ像^ノと^トと^トそ^ノを^シび^ビて^テた^トに^ニあ^ルど^ウり^リけ^ケり^{タリ}也^{ナリ}

尾列葉栗郡光時寺村遍照山光明寺天武天皇
白鳳六丁丑年創建之本願也中葉栗巨人
摩也

或向明季福列鄭芝童之子森官俗呼國姓爺
者其名乎曰森官者俗稱名報字成功以奉明
主保中南隅賜國姓也
為國姓爺一向森官有嗣乎曰有之名曰
羅俗呼曰錦舍經之子曰秦舍數年保大宛
後降清人我貞享改元也

戊午三月果主挂自償帝位建元曰昭武國号大
周嗚呼三十年來之素心何為乎倣曹操未温之
纂奪者也尔後未聞其終如何也今清朝星
平而天下休兵于時康熙三十八年下我
今上元祿万歲十二年己卯

勝名荒神祠

曾我五郎藤原時宗之灵也祠在相列管根山
祠号源賴朝卿所名其祠久頽敗稻葉美濃
寺越知宿祢正則再興之使向陽林子書之記

王荆公在熙寧中作字說行之天下東坡云曰
恐每々牽附學者兼凡有下不勝其鑿者姑以
犇鹿二字言之牛之躡壯於鹿々之行速
於牛今積三為字而其義皆反之何也荆公
无以答云岳珂程史

延喜以來至後冷泉帝則國政多是出自藤氏
自後三條帝至近衛帝則多是太上皇之政也
保元以後政權移於武家此是國家之變操筆
者不可不知焉

延喜以後或有略記僅存或有日記演史稗說倭
字稍遺或有口說流傳者其際真偽相雜操翰
者豈其容易哉

右林春春奉_{ニテ}台命_シ所輯錄_ル本朝通鑑_ノ條例
之内第六第十六條目也寛文四年甲辰十一月
朔日記_{スト云}

渡辺綱 姝源朝臣嵯峨帝之曾孫從五位下
俊_ト或_ハ作_ル任_ス武藏守_ニ其子_ラ曰_ク亮_ト留_テ為_リ列士_ト任_ス武
藏國_ヲ任_ス原那_ト洪谷_ト莊_ト箕田_ト村_ト即綱_ノ父_也綱

臣追崇以位階則可也豈以祖宗之神比王臣謂之尊崇之礼而可乎故謂神社品位神稅田賦之級而不以神靈為上下也然今无其本據暫書之以俟後君子位田之教見田令

●熱田太神宮秘密記云四面八町内可有諸木八十八株八十八社神也云云有靈木三株一西方屋前有松賀茂大明神一楠御前春日大明神一海藏門東腋有梅樹松尾太明神也

按此記後三条院延久元年三月廿九日之記也

其說多習合家餘談而甚不經也但大宮司尾張貞信權宮司尾張有信惣檢校尾張信正治頭正四位下尾張貞胤等連署則於古實有可取乎又按延久元年八月勘文貞信從三位仔勢守貞胤從三位兵部大輔也見應仁元年七月四日寫本

○四書大全說約合參正解清丹陽吳荃蓀右所彙輯康熙十八年丁丑我廷室大史車萬育為序增刪四書正解康熙二十四年丁丑我貞室岡三山

高亮於京江公四者為之序同二十七年我

元禄元
成辰 采荃自為序 題於深柳堂

右二書大同而增刪を正約也 合參正解我邦

已梓行ス之ヲ

逆知テ其情ヲ而逢迎メ以合之

迎合

彭孫韋ヲ為李憲濯テ足曰大尉足何香也以足踏テ

奴諂

其頭曰奴諂不夫甚乎

夸毗

屈レ已卑身以柔ノ頃人也夸大也毗輔也小人之態
不為大言以夸世則為毗言以輔人

出類書纂要嗚呼世俗以迎合奴諂夸毗等ノ事

服事人而人反呼為好人哀哉

五色の尾張の海舟帆々作勢をこれ舟の遊凡

鳥丸太舟を光廣の舟の舟の作勢め終にりせ

おりのありの海といふもけ舟尾張の海といふ

これハ水の北と陽と云尾張の海南にりる尾陽と云

故にふめり

元周達觀真臘風土記曰亦有宮觀但此之寺院

較狹而道教者亦不如僧教之盛耳所供无

別像但止一塊石如中国社壇中之石耳

本朝神社以石為主者間之有蓋似之凡此記
書異俗者許多也且城門金橋金獅子二枚列
於橋之左右云是亦似吾朝廷之銅犬及
神社所置獅子又有供佛像用吳肉者
南曰摩加鳥安樂寺弥陀像時々供吳肉者
似之但日摩加供莫者蓋此像本日摩加
神社正躰之像後祠亡而為寺故土民存
古凡然欽以真臘之俗莫附會又按真臘國
即世所謂甘字智也曰激浦只

赤辨真偏卷中云日本武丸云度丈白鳳鳥

自天蜚降向東飛去即遣使比八叙殿以後

靈地當白鳥殿而奉鎮座云

謹按此說似大成經有古書款可尋之

契田太神宮秘教見圖抄曰白鳥塚者大明神ノ
御塚也中有馬腦石塔座者八葉也又塚中有
九穴八葉九尊各住所也云

謹按是白鳥山法持寺境内白鳥塚也今存
小祠契田社說祭日本武尊幸魂然白鳥ノ

陵在剗所則有_レ可_レ疑者歟

● 星槎勝覽曰錫蘭山國海邊有_二盤石上_三印_二足跡_一
長_サ三尺許_ガ常有水不乾稱為_下先生_上叔迦佛徒翠
藍嶼未登_レ此山足蹟_上其迹_上至今尚_レ存_ス也

我_カ尾南智多郡有_下稱_上金玉丸_之足跡_上盤石似_レ之

● 菅原道真公字_下玉世_上稱_ス菅_三文尾_一康秀字_琳而稱_ス
文琳_一平_一貞文字_仲而稱_ス平仲_一善清行字_耀而
稱_ス三耀_一紀長谷雄字_寛而稱_ス紀寛_一此類猶多_見
林氏菅丞相傳_古人有名有字者多_自中世_一

大概无_レ字我_カ先君義真公御字_敬而稱_ス源敬_一
又綱誠公御字_明ナリ

● 宋敏求_カ春明退朝錄曰唐在京文武官職事九品
以上朔望日朝_ス

印約約々_十日君母物_々との蓋_三唐_一の内俗有り
廿八日の礼_とる_一母_レは但文武五品以上五日早
一日廿_二日_一参_一一_二京_上ハ_九十_二日_一又
参_ズと_同書_母凡_五廿_二日_一の参_を我_カ約_々の
礼_を々_々

又云皇后有謚起於東漢自是至千隋皆單謚云
又云木末詔諸儒編故事一千卷曰太平總類文
章一千卷曰文苑英華小說五百卷曰太平戶記
醫方一千卷曰神醫普救總類成帝日覽三
卷一年而讀周賜名曰太平御覽

● 信景曰元祿己卯十一月十日熱田社に傳りて傳りて曰
しも新嘗祭の以の口めて神社の祭記あり
直舎の式物ありし樂人長安子と養して尾張氏
爲備舞とせり又祭と神廟の上へるげて鳥

を後しむをと傳りてけの祭と成祭と俗を云
む於凡此と藝部殿傳とを傳りてやいふ
州中傳の宮二月の祭にも鳥と呼とる海部郡は
傳の社もも祭の日祭と鳥にあつた所は後
● 悉陀太子四方のを傳りて天上天下竜まの文字
はても悉く知悉りて親迎禮にあり是傳屠氏の考
言りて取ルにたつと下敷に神と云て天上と
葦原中國と竜まの書ありるとあといふ言
と吐を親迎禮のとも取つていふなり國より智略

此類を隈づけり柳佛法も同くこれハ利潤の便り
阿^{アミ}論^{ロニ}てふ也と云り且唯一の神^{カミ}なりとて
夸^{ホコ}里^リ侍^シりも佛書に三界唯^{タラシク}一心と云唯有一^{ヒト}之法と
いへる語を羨て神祇乃^{カミ}其^{カミ}附^{ツキ}舍^{ケル}けりも外今世祠
官等^{ミヤウボウ}行^{ユク}法^{ホウ}とて^{カミ}其^{カミ}多^タと^{カミ}足^タれ^{カミ}皆^{カミ}密^{カミ}家^{カミ}の^{カミ}事^{カミ}と^{カミ}望^{カミ}
と^{カミ}り^{カミ}て^{カミ}名^{カミ}義^{カミ}と^{カミ}変^{カミ}じ^{カミ}り^{カミ}斗^{カミ}て^{カミ}支^{カミ}と^{カミ}傳^{カミ}受^{カミ}して^{カミ}秘^{カミ}藏^{カミ}
侍^{カミ}に^{カミ}拙^{カミ}く^{カミ}淺^{カミ}る^{カミ}これ^{カミ}バ^{カミ}近^{カミ}世^{カミ}神^{カミ}乃^{カミ}者^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}者^{カミ}多^{カミ}し
或^{カミ}を^{カミ}習^{カミ}合^{カミ}家^{カミ}の^{カミ}餘^{カミ}迹^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}家^{カミ}の^{カミ}故^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}神^{カミ}明^{カミ}と
あ^{カミ}ら^{カミ}り^{カミ}或^{カミ}を^{カミ}文^{カミ}字^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}と^{カミ}別^{カミ}に^{カミ}神^{カミ}代^{カミ}の^{カミ}侍^{カミ}の

秘説ありまじり胡説と仰て惡俗とまじりし本則を
さくばり出しそ一家の秘を立割て造言の罪を犯して
偽書をとも間板へ侍れと國政とも憚らざる大罪
人なり習合一変して此凡と云れ里秘也とてそ
實は上^{カミ}部^{カミ}秘^{カミ}の^{カミ}秘^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}と^{カミ}い^{カミ}ふ^{カミ}
奉^{カミ}川^{カミ}推^{カミ}足^{カミ}り^{カミ}起^{カミ}里^{カミ}侍^{カミ}れ

● 歷代小史ノ一百四卷^{カミ}徽^{カミ}紀^{カミ}聞^{カミ}喪^{カミ}夷^{カミ}章^{カミ}多^{カミ}載^{カミ}絶^{カミ}域^{カミ}異^{カミ}俗^{カミ}
記^{カミ}其^{カミ}一^{カミ}二^{カミ}如^{カミ}た^{カミ}苗^{カミ}人^{カミ}古^{カミ}王^{カミ}苗^{カミ}之^{カミ}裔^{カミ}也^{カミ}云^{カミ}與^{カミ}氏^{カミ}夷^{カミ}混^{カミ}
雜^{カミ}通^{カミ}曰^{カミ}南^{カミ}蠻^{カミ}云^{カミ}白^{カミ}一^{カミ}以^{カミ}雞^{カミ}骨^{カミ}推^{カミ}之^{カミ}視^{カミ}其^{カミ}壘^{カミ}以^{カミ}

新ニ凶ニ吉ニ式折テ茅ヲ為レ兆ニ云云元日為レ祀忌ト敵門ト不出テ
二七ニ而解ト犯レ之者以テ為レ不祥ト

○竜家蓋シテ徒ニ馳リ氏ノ之裔云云以テ七月七日祭ル其ノ先ヲ整ラ

○獠人古稱天竺ニ云云左異者則有リ飛頭鑿齒鼻
飲云歲首則以テ土盃十二貯レ水隨テ辰位布テ而禱
焉ヲ經テ夕集テ衆往テ觀ル若シ寅有レ水而卯ニ酒則知ル正
月兩二月早ク云云

按ニ膏台茅兆似シ吾古俗歲首不出テ門ヲ者今我
國所レ猶シ在也七夕墓祭亦俗間行フ之以テ水占フ

水旱似我熱田社代試祭其餘有テ我俗似ル
者上今略ス之ヲ

○周禮曰以テ禋ニ祀ニ祀ニ昊天上帝ヲ以テ實ニ柴ニ祀ニ日月星
辰ヲ以テ禋ニ燎ニ祀ニ司中司傘ノ觀ニ師ヲ兩師ヲ注シ曰三祀皆テ
積ニ柴ニ實ニ牲ニ躔ニ焉ニ或ハ有テ王帛燔ニ燎ニ而升ス煙ヲ所以
報シ陽也云云

礼記燔ニ柴ニ於テ泰壇ニ疏ニ云謂積薪於壇上而取リ王
幣及牲置ニ柴ニ上燔レ之ヲ使テ氣達ニ于天也祭禮通
解云陽祀ハ自リ煙始云

按是中國王者祀天神禮也。且諸侯而不能為之也。然後世方士等假事變名為之。云設醮安為祈禱。其後報氏又私竊之。為十二天燔香木名云護摩供。為王王之祀。人不諱其本為中工王者之祀。徒信偽作佛經。辱我國近年。卜部氏火於祠前。禱祀其行法。竊淳屠之護摩。而變事。換各而為己之家事。偽語自神也。相傳欺教。諸國祠官貪利穢神。可痛哉。

市相魁頭假面我邦神社有藏之者名曰猿田彦之面固附會也。然按類書纂要方相開路之神也。

又曰陰道人我猿田彦大神開路而導天孫

故託之手我尾州大國靈神社有稱司宮神假面

或曰猿田彦祠官甚畏之蓋是往昔儼鬼所蒙

方相之假面也誤曰司宮神也又書主宮神疑

狐神之訛言乎俗巫以三狐神書社宮神幸宮

神等字司宮主宮亦誤三狐之音乎

さぶらむハ正月に撃ちて毬杖と真言院より引

キマヤウ

泉苑に出して焼あがらぬ 徒出原

さぶらふといふもの 毬杖と焼取名とせり 俗有ハ西
域義長チヤウ又ハサダ義長ギギを以て己が敵分出せり
不経の祝と云は法陽サダの杖杖と書て巨魁コケイの杖
とい俗儒ハ又爆竹ハクシに附合して其の俗に所謂
爆竹と云て燈と有り似て之を雷を非之門戸に懸
松竹及び端出繩等と焼し神と敬して奉り之用
ひし物と云は御と信じて之を為せりハツと云く
さぶらふといふ混へば毬杖キツチヤウと焼しと忘

此ていろいろの矣祝祭リクマヤ（六）も次言ふと
（七）のすもおのりけりこれハ吳郡（八）と
うち侍をせりとする上のさぶらふて武変と習ハヤ
唐の代撃毬ゲキキウと云てあそぶと云く穆宗時
あそびろきと云ふは中如殿ニ幸ありて毬（九）
撃たりと云通鑑（十）ハ人主荒縦と好まふ
と云ふに等しき事と云は是と傳て今も京ハ
年の始に童子の戯毬杖と云てあそびる蹴
鞠ハ足めてけあげ撃毬ハ靴めておりの目

形ひの威を造りて歩を踏ウチマリ蹴キキ毬名別ウチマリのしこる
 ありと疾京師ニ責毬杖と片本と玉の形ニ丸く
 作り椎のまじさ杖を切ツ又人形を獸剪シクリ彩花を
 どとりつけぶりて毬杖とも足之原赤登さやうと
 てもあり世後たゞ臣觀とのそぎ侍らぬこそ
 りとと多り或人云物モノ文ブキとて質とそぎ
 ありは是めてもそぎととりたにものと竟く侍ら
 玉ゆりくと毬杖の変風有り田舎イナにハ毬杖とて
 あそぶとととそぎとあり

雀字也 鳥雀篆



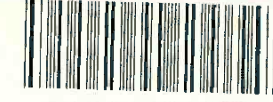
見撰羅士車合併石部入水入十一按鋪野
 山宝印為鳥形之字者本鳥雀篆平

- 清敬堂前補万宝金書載滿列字式滿列即魏朝也其国字凡二百九十字各以中国字譯之
- 牧地飯沼等語帰括ヲ考按第入福多殺地用此以嗜知ル、禊之者ニ入 泰ニハ入
- 石ノ帯ス 衣冠ニハ 祿名帯カ

塔タ
院イン

寺家シヤ
のノ
と

愛 知 県



1103280397